

## 海外先進地行政調査報告書

平成 24 年 5 月 22 日（火）～29 日（火）

派遣議員 野場慶徳、今井隆喜

### 「アメリカ西海岸における公共図書館及び図書館サービスの現状」

#### ■視察の目的と経緯

今回の視察の目的は、安城市の中心市街地交流広場内に平成 26 年度に建設着工予定である拠点施設の実施計画を作成するうえで、計画の柱でもある新図書館の充実を図るものであり、アメリカでの図書館政策における先進的な取り組みを学ぶことであった。また、アメリカでの政策の中身であるサービス、プログラムの充実等、ソフトの部分の取り組み内容を詳しく調査すると同時に、ハード面では近年アメリカ西海岸における大規模な公債発行による図書館建設が行われているが、こうしてできた斬新なデザインの施設をいろいろ見ること、本市の計画の参考とすることが視察の最大の目的である。

経緯については、安城市の現在の図書館の状況と合わせて説明したいと思う。

安城市（18 万人）の図書館の利用者数は、中央図書館 1 館（開館日数 289 日）及び、地区公民館図書室 9 館と子育て支援センター（あんぱーく）図書室、保健センター（赤ちゃんえほんかしだし隊）を合わせて、年間 43 万人余である。また、年間の貸出総数は、193 万冊余である。このうち中央図書館（昭和 60 年建設）での利用者数は、年間 24 万人余（貸出のない人も含めると 44 万人）で、貸出総数は、117 万冊という状況である。ちなみに、市の中央図書館は、建設された昭和 60 年に比べて、市の人口は 5 万人近く増加したことで、利用者の数も年々増加し、同時に、平成の出版ブームも加わり、中央図書館の蔵書能力の 35 万冊を大きく超えて、現在は 44 万冊もの蔵書で埋め尽くされている。

現在の中央図書館は、このような理由から施設の規模としての限界を超え、いろいろと問題が生じてきたことが、今回の新図書館を作る始まりであると認識している。

こうして、いくつかの状況を踏まえ、新図書館の計画は平成 22 年 3 月に策定された新図書館基本計画及び中心市街地拠点整備基本計画の中で、イメージとして初めて描かれ、その後、平成 23 年 3 月に策定された中心市街地活性化基本計画の中にも盛り込まれた。

そして、現在進行中の南明治第二土地区画整理事業で、平成 26 年度着工を目指している中心市街地拠点施設の事業計画が 24 年秋頃には出来上がる予定であり、その中で新図書館建設の具体的な姿が提示される予定である。

本年 1 月にアメリカ東海岸の図書館事情を視察した神谷市長も、この最終的な実施計画を作るために、先進的なアメリカでの事例を調査して参考にすることが目的だった。今回の私たちの西海岸への視察も、その第 2 弾ということで、更に幅広い分野の見地からの意見を取り入れるためそれぞれの分野からメンバーが編成され、実現したのが経緯と言える。

1月に東海岸を視察した神谷市長は、アメリカでの図書館事情についての報告会が行われた際に、「現状を目の当たりにして、文化等の違いはあるものの参考になる部分が多くあった。『百聞は一見にしかず』。関係者の方々にもアメリカの先進的な取り組みを見てほしい」とのことで、教育関係者1名、図書館関係者1名、情報システム関係者1名、議会関係者2名の合わせて5名が選抜され、議会において5月の臨時会で予算が可決され正式に結成された。

○期 間 平成24年5月22日（火）から5月29日（火）

○予 算 議会から派遣2名分として、80万円（5月11日補正予算で可決）

○調査先 アメリカ西海岸のワシントン州及びカルフォルニア州内の図書館等

選抜されたメンバーは、行政側から、本田吉則教育長、岡田知之中央図書館長補佐、武智仁情報システム課課長補佐、議会側から、野場慶徳議員（前中心市街地拠点整備PT副座長）、今井隆喜議員（前市民文教常任委員長）の合計5名である。

## ■ワシントン州に到着

5月22日（火）、東海道新幹線三河安城駅から新幹線こだま号で品川駅へ向かい、成田エクスプレスに乗り換え、成田空港へ到着。成田空港からは、ユナイテッド航空に乗り込み約10時間のフライトでアメリカ合衆国ワシントン州シアトルへ向かった。

小雨の降るシアトル・タコマ空港（通称シータック空港）には、現地ガイドが出迎えてくれ、少し肌寒く感じる中（気温は12℃ほど）、私たち一行は早速、シアトル市内へ向かった。車中では、ガイドから「シアトルは7つの丘からできていて、街は山を削って造られた。非常に急な坂が多いが、山側が東、湾側が西となっていて街は東西南北に、碁盤の目のようにはっきりと区分けしてある。信号から信号がワンプロック（40秒ほど）で区切られていることなどが特徴である」という説明を受けながら、目的地であるシアトル市内の旧日本人学校跡地に事務所を構える兵庫県ワシントン州事務所へ到着した。

初日に当事務所へ向かった理由は、今回の視察の日程調整をお願いしたクレアに現地の行政機関で、事前に現在の街の情報や状況を知ることができないかと相談したところ、ワシントン州（約683万人）と兵庫県が姉妹都市交流をしているということで、紹介していただいた。

事務所では、水口典久所長、雑賀裕子総務兼経済開発マネージャー、日本でALTの経験もある外国人スタッフの方の出迎えを受け、ワシントン州の概要や、シアトル市政府の組織、シアトル市内の図書館事情など説明を受けた。実際にシアトル公共図書館からの電子書籍の借り方もiPadを使用して実演してくれた。その後の意見交換では、「大規模な予算を投入して図書館が建設されたことに対して市民の方々はどのように感じていますか？」との質問には、実際にシアトル市民である外国人スタッフの方から、「市民感覚では、

街のバリュー（価値）が向上したと思う。自分自身も市のチャレンジ精神を応援している」と返答があった。その後は、当事務所の施設を一部見学させていただいた。

### ●ワシントン州の概要

- 州都 オリンピア市（政治が行われている場所）
- 面積 172,263 平方キロ（日本の約半分）
- 人口 約 683 万人（シアトル市 61 万人、オリンピア市 4 万 6 千人）
- 人口密度 1 平方キロあたり 39.6 人（シアトル市 1,657 人）
- 人種 白人 77%、ヒスパニック 11%、アジア系 7%、アフリカ系 3.6%、先住民 1.5%
- 財政 約 300 億ドル（2007 年～2009 年の 2 年間予算）
- 州総生産 3,112 億ドル（2007 年全米 4 位）
- 世帯収入 57,244 ドル（シアトル市内及び近郊 65,383 ドル）
- 主な企業 ボーイング社、マイクロソフト社、スターバックス社、アマゾンドットコム社

### ■シアトル公共図書館

23 日午前、シアトル市（約 61 万人）にある「Seattle public Library シアトル公共図書館」中央館を視察した。

シアトル公共図書館の始まりは、1909 年にカーネギー財団が建設したのが始まりで、その後、1959 年に公共図書館として 4 階建てに建て替えられ、そして今回の地上 11 階、地下 1 階（駐車場 140 台）建てになったのが 2004 年である。外見は、美術館を想像させるようなデザインで全面ガラス張りという図書館のイメージを一新させたものに生まれ変わった姿は当時、世界中から注目を浴びたとのことだった。

建築はオランダの OMA 建築事務所と地元シアトルの美術館、オペラハウスも手掛けている LAM 建築事務所が共同で行った。

建設予算は、総額で 15 億 6 千万ドル（当時の日本円で約 150 億円）という破格の金額だが、中身を聞くと、この金額は、1998 年に公費のシアトル市債（10 年間）として発行が認められた額とのことだった。



（↑シアトル公共図書館の外観）

また、アメリカでは寄付文化が広く浸透していることもあり、プライベートでの寄付の部分もこれ以外に多く施設内には存在し構成されていた。驚いたのは、シアトル市はマイクロソフト社本社があった経緯から、スタッフが使用する管内すべてのコンピューターや、1階にある講堂が当社から寄付されていることである。3階部分にも、これまたシアトル市内に本社があるスターバックス社の寄付で出来たティーンオンリー（十代専用）のスペースも存在していて、一角にはマンガも読めるようになっており、スケールの違いを感じた。



まず1階には、間仕切り可能な大講堂 275 席+100 席に、赤ちゃんから 10 歳位までが対象の児童館、そして、アメリカは非常に移民が多いため、世界各国の雑誌や本を陳列するスペースがあった。



2階は、スタッフ専用のスペースとなるため、エスカレーターで3階に行くと、庭をイメージして設計されたというだけあり、日光で明るく、緑が多く使用されたスペースが存在する。また、先に述べたようにシアトル市は、非常に坂が多く、この図書館自体も西側の入口は1階にあるが、東側の入口はこの3階に存在していた。

(←開館前に撮影)

入口付近には、友の会が運営する SHOP もあり、ここでの収益は図書館の運営費として寄付されるということだった。中央には司書がいて、様々な要望に応じている。

4階は、貸し出し用の会議室等があるスペースがあり、料金を払えばいつでも利用できる。

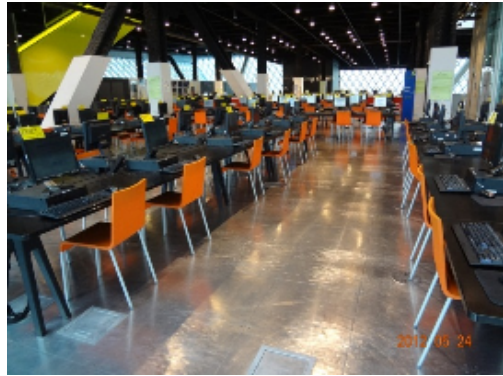
5階には、200 台のインターネットが利用できるパソコンが並び、会員カードを持っていれば、一人一日 90 分まで利用ができるとのこと。主に、職探しのために訪れる人が多いそうで、バッグ片手に不労者の方が、開館前から入口にたくさん並んでいたのが印象的だった。



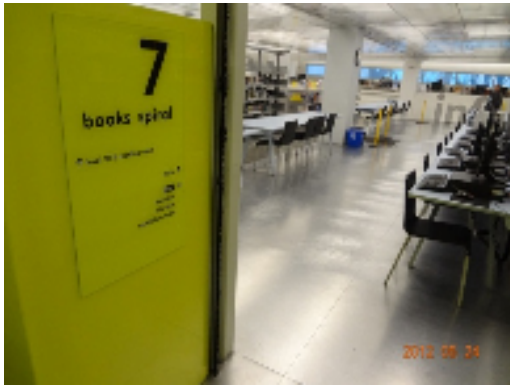
また、後日夕方の時間に再度、図書館を訪れた際に、このコーナーを見てみたら、パソコンコーナーは、ほぼ席が埋まっていて満席状態だった。

6階から9階までは、らせん状に一般開架のスペースになっていて、エスカレーターで上がっていくと、左右の景色が違うというすごく不思議な空間だった。

見た目は、この階層に人の数は少なく、どちらかというと書庫が普通に並んでいるといった感じだった。恐らく多くの方は、ここでわざわざ探すことなく、下の階のレファレンスデスクにて必要とする本を検索してもらったり、ホームページからインターネットでの予約したりしてしまうため、この階を利用する時間は少ないのではないかと思った。



(↑開館前に撮影)



10階には、曇りの日でも天井から差し込む光で明るく心地いい閲覧学習コーナーがあった。

10階中央天井部分に11階があり、そこにはこの図書館の事務室があった。

11階では、今回の視察内容についての意見交換を行った。初め、当館のプログラム・サービス開発部長であるチャンス・ハントさんとの意見交換では、ハントさんからは、「1998年から2008年にかけて全組織を再編成した。10年間で

26の建物（分館）をリモデルし、パソコンに接続できるようにした。総計で1000台（27施設）がオンラインで結ばれた」との説明があった。

結果、ネット上でいろいろなインフォメーションが提供されているので、ここでは1対1の指導なども行っているとのことだった。ほとんどのパソコンが開館時間中全て使用されているが、まだまだマウスの使い方もわからない人もいたので、使用方法なども教えているとのことだった。

話の中で、驚いたことは、ここでは年間6,000～6,200のプログラムを作っているということだった。中でも、子ども向けのプログラムに力を入れていて、子どもたちの成績が上がるように100人のボランティアが子どもたちの宿題を見ていたり、0歳から5歳までのプログラムは、このうち約半分の3,000程度あるということだった。ハントさんからは、「10年間やってきて子どもだけではなく、



子どもの親向けのサポートも有効だということが解ってきた。子どもたちからは、宿題を学べるだけでなく、大人たちと良い関係を築けることがいいという意見があった」とのことだった。

今後の方向性について質問すると、新しいインフォメーションを作ることで、例えば、本を作るだとか、論文を作るなどの支援も考えているとのことだった。

また、26ある分館との役割分担について質問すると、「どの分館でもパソコンでつながっているが、コミュニティの要望によって出しているプログラムが違う。例えば宿題のヘルプを要望する分館は、26館中11館しかない。それぞれ分館自体はコミュニティによってちがった役割があるため、中央では違ったプログラムを作っていかななくてはならない」とのことだった。

続いてのテーマ、電子書籍については、カートブラウンさんとドームハンさんが我々の質問に答えてくれた。

当たり前だが、出版社の本音は、図書館には売りにたくないそうだ。それが一番の問題だという。だから電子書籍の数は、まだまだ限られている。今も全国の図書館と出版社とで会議を重ねているそうである。アメリカには6つの大きな出版社があるが、現在このうち2社（オーバードライブ社と、サファリ社）しか電子書籍を売ってくれない現状である。しかも図書館は一般よりも割増して購入しているため、電子書籍の予算については、コレクション予算の全体の10%程度+基金で年間90万ドルくらいとのことだった。

「電子書籍が進むと図書館に足を運ばなくなるのではないか」と質問したところ、「今でも図書を自宅で予約して、近くの分館で借りている。だから書籍が電子化されても変わらない」とのことだった。

電子書籍の普及に関しては、アメリカでは、アマゾンから発売されているKindleや、アップル社のiPadなどの普及もあり近年飛躍的に利用が伸びてきているものの、図書館での利用に関しては、やはり出版社の抵抗があることから日本と同様に、まだまだ高いハードルがあると感じた。

## ■ 中学校図書館

23日午後からは、「Whitman Middle School ホイットマン中学校図書館」を視察した。

ここでは、主に学校図書館の役割と公共図書館と学校との連携について意見交換した。

説明をしてくれたのは、学校司書（元教員）のクリスさんと、シアトル教育委員会の担当者の2名だった。



中学校と言うと日本では 13 歳から 15 歳という印象があるが、アメリカでは、日本の小学 6 年生から中学 2 年生に当たる 12 歳から 14 歳までを中学生と言うそうだ。生徒数は 1000 名で、先生の数 は 50 名、1 クラス約 30 名ほどで構成されているとのことだった。

この学校の図書室には、12,000 冊の書籍と、クラス単位で使える数十台のパソコン、数台の e リーダーも貸し出し用に置いている。そしてこの部屋自体を司書のクリスさんが管理しているとのことだった。クリスさんは、12,000 冊の本に関して、「何冊あるのかではなく、目的にあった本を置くことが必要である。もう一つは、マンガ等、楽しみのための本や、最新の新しい本などを置くことが重要」と言っていた。

5 月に 1 年間のプログラムとして、50 冊の本を選び、クリスさんが全て読んでから、子どもたちにはこの内の 1 冊は読みなさいと言っているというから驚いた。確かに、本の内容についていろいろとアドバイスができるわけだが、大変な作業だ。

公共図書館との連携については、各分館の司書が 1 名、シアトル市内の各校の担当になっているようで、司書は宿題のあまりないアメリカの中学生の夏休みの読書プログラムを考えたりして、公共図書館との連携をしているとのことだった。また図書館で地元の本の作者を呼んで話を聞かせたりするイベントなど、土曜日に皆で図書館へ出かけたりしながら、学校司書と分館司書とで連携を取っているとのことだった。



面白い取り組みは、図書館の IT 化についての質問をしたところ、テクノロジーの使い方方を教えることに力を入れている。例えばワードを使ってエッセイを書いたり、エクセルを使って計算をするなど、生産につながる教え方をしているそうだ。また最近では、より慣れるためにスマートフォンや iPad の学校への持ち込みを許可して、実際の授業で先生の指示で使用しているとのことも驚きだった（廊下での使用は禁止らしい）。

## ■グリーンウッド分館

続いて、実際に中学校図書館との連携を取っているシアトル公共図書館（中央 1 館・分館 26 館）のうちの一つである「Greenwood Branch グリーンウッド分館」を訪問した。

実は、当初の予定にこの分館は入ってなかったが、学校と公共図書館との連携をしている様子を実際に見てみたいとクリスさんをお願いしてみたところ、快く頼ん



でくれた。

早速、分館に着くと入口付近で、若い子どもたちが数名、集まって会話をしている風景が目に入った。図書館に入ると、まず感じたことは、中央図書館同様に、この分館もおしゃれな設計で、室内にも日光がよく入り、とても明るい空間だということだった。

入ってすぐ右には、予約された本とディスク（CD・DVD）が3つの棚一杯にズラりと並んでいて、中央にはレファレンスカウンターが設置されている。その他の場所は、パソコンコーナーと読書スペースになっていて、どの場所も平日なのに利用者でいっぱいだった。



感じとしては、地域の方々が憩いの場としても気軽に利用できる公民館的な施設の役割も担っているのではないかと思った。また、実際に分館を見て、中央図書館と分館との役割も全く違うということが、何となくわかった。

#### ■ティンバーランド地域図書館

24日は、シアトル市内から車で約90分かけてワシントン州の州都であるオリンピア市郊外にある「Timberland Regional Library ティンバーランド地域図書館」のサービスセンターを視察した。

このセンターは、1968年にワシントン州39のカウンティ（郡）のうち、5つのカウンティが統合して図書館運営におけるサービスセンターとして設立された。ここでは主に、5つの郡の図書館28施設をネットワークで結び、郡内の図書館行政、人事などすべてを管理する。また、各図書館の蔵書の実態から、パンフレット・チラシ等の作成業務に関しても、一元的に専門的な人材を活用して行っている。

○5郡合計人口 47万5,000人

○カード会員数 32万1052人

○スタッフ総数 335名



特徴は、5つの郡内は、どこもサービスエリアが広いので、28施設にセンターを含めて800台のパソコンを導入して、中央のセンターにいる7名の専門スタッフが、常にトラブル対応や、各施設の担当者や、利用者へのパソコンの使用方法等含めて対応していることで、説明の際には、わかりやすいようにどの施設でも同じパソコン、同じソフトを使用している。利用者は、各施設で、6台から40台の予約制の市民用のパソコンが設置されているが、会員であれば1人1日1時間まで利用できる。常にほとんど満席だという。

こうして、郡内のIT化を進めることは、近くに図書館がないへき地での利用者に対して、自宅でもネットで本を選んで予約すれば、近くまで専用の車で運送してくれ、更には





(↑ 郡内の図書館前の返却ポスト)

返却だけなら、図書館前に設置された返却ポストやスーパーでも返却可能とのことだった。

また、市民の声を取り入れて始めた eBook（電子書籍）については、2006 年にオーバードライブ社と人口比における大口契約をして、図書館のコンピューターにダウンロードして使用しているとのことだった（1つのデータベースで、年間 2000 ドル～20000 ドル程）。

現在は、まだタイトルが限られているが、ダウンロード数は年々増加しているとのことだった。

センターを出た後に、近くのタムウォーター図書館へ立ち寄り、平日の昼間の時間での利用状況を見て感じたことは、備え付けの数台のパソコンコーナーでの利用者以外は、滞在と言うよりも、予約した本を受け取りに来たり、駐車場の返却ポストへ本を返しにくるなどの理由が多いイメージだった。限られた時間だったが、人の出入りは比較的が多かった。

その他には、様々な情報発信をするために、ツイッターや、フェイスブックも活用しているとのことで、図書館の本棚の上には、QR コード付きの掲示板がおいてあった。

## ■ エバークリーン大学図書館

24 日の午後からは、オリンピア市郊外の「The Daniel J. Evans Library.theEvergreen State College エバークリーン大学図書館」を視察した。

この大学には、学部がなく、教授によってカリキュラムが作られているということだった。例えば、教授によって、日本のマンガを使用して授業をすることもあったり、もちろん専門的な分野の授業もあるが、この図書館では、そうした授業に必要な蔵書を置いているという。

公共図書館との連携について質問すると、「公共図書館と州内の 2 つの大学でデータベースを共有しており、学術図書館として存在しているが、一般市民でもここに来て本を借りられる」とのことだった。また、デジタルアーカイブについて質問したところ、大学の歴史や、写真、絵画、資料を含めて現在、記録をデータ化しているとのことで、さらに今後は、教授や学生の研究したこと等もデータ化し、残していきたいとのことだった。

図書館では、ノートパソコン、eリーダーを利用者に貸し出しもしていた。



## ■キング郡図書館システム

5月25日は、シアトル市内から車で30分移動し、「King County Library System キング郡図書館システム」サービスセンターを視察した。

日本で言えば、おそらく県の単位となるカントリー（郡）だが、規模は大小様々で、キング郡は、人口300万人、郡内には、シアトル市（61万人）を含む、ワシントン州の中では大きな郡の一つと言える。

キング郡内には、42市と、18学区あるが、都市のシアトル市と、その他に2つの施設以外の47施設をネットワークでつなげて管理している。

キング郡でも、2004年に10年計画により公債を発行して、サービスセンターを始め、いくつかの建物を新たに作ったが、アメリカでは、こうした図書館の運営費には、固定資産税の約1%が使われるそうで、キング郡のように固定資産税のたくさん入る裕福な郡は、こうしたサービスも充実しているというわけである。



余談だが、初日のシアトル公共図書館で聞いた話だと、アメリカでは、公債を発行するルールの中に、予算の1%は美術品に使用しなくてはならないルールらしく、キング郡のこのセンター内でも様々な場所に、美術品らしきものが飾られているのが目立った。

会議室で、インフォメーションテクノロジーサービスの責任者 Jed Moffitt さん、パブリックサービスの責任者 Denise Siers さん始め、3人の方にセンターのシステムについて説明をしていただいた。

センターの位置付けとしては、ここも先日のオリンピア市のサービスセンター同様に郡内47の図書館システムの中央管理センターといったところだが、ここでの取り組みは以前ライブラリー・オブザ・イヤーを受賞するなど、そのサービスの高さは他の地域からも注目されている。

私たちは意見交換の中で、主に賞を受賞した要因は特にどんな点だったのか、また電子書籍の状況、センターとしての今後の展開について担当者に聞いてみた。



担当者からは、「受賞の要因としては、貸出率、利用率、サービス、プログラム、そしてもちろん新しい建物をいくつか作ったことなどすべてがトータルで評価された」との回答だった。例えば、失業者対策のプログラムは、履歴書、面接の受け方まで含まれている。実際に Work 組織（恐らく日本で言う職安）と相談してプログラムを作った。また、図書館に来られない人に対しては、ブック車を 10 台程持っている。ブック車については、キング郡は面積が広いため、いくつかのクラスターにまとめ車を配備していて、例えば、個人の保育所や、ディセセンター、地域の祭りにも使用している。こうした、サービスを支えるボランティアが 100 名ほど存在するが、参加は高校生から可能としている。このほかに、学校などとも連携をとりながらプログラムを作っている。例えば、図書館のスタディゾーンでは、子供たちの宿題を手伝うボランティアがいる。さらにオンラインでも宿題を手伝うサービスを行っている。また、ブック・フォー・ベイビーズとして低所得者層の子供の親へ、子育てについての本などを支援している。さらには、読書好きの地域に変えるためのプログラムとして、「Take time to read（読書の時間をつくろう）」として図書館の入口や中に、おすすめの本の表紙を飾り、美術品みたいにして紹介する取り組みも行っているとのことだった。

また、電子書籍に関しては、ここでは 3 つの会社（オーバードライブ社・レコーデブックス社・ベイクテイラー社）を通じてサービスを行っている。契約に関しては、サービス料を年会費として払っている。本は一冊ごとに購入しており、代金には、基本料＋システム料が含まれている。購入方法は、会社によって内容が異なっている。一つの会社では、電子書籍自体を紙の倍の値段で売っているが、もう一つの会社では、値段は同じだが、26 回使用すると消滅する仕組みになっている。電子書籍数は 2011 年度で、18,000～20,000 位だったが、今後は、30,000～32,000 程になるのではないかとのことだった。

利用者は、会員カードをもっていれば、図書館のページを開き、パスワードを入力すれば、オーバードライブ社からダウンロードできる。ダウンロードした電子書籍は 21 日間で返却しないでも消えるようになっている。

ちなみに、ebook（電子書籍）のダウンロード数は、2011 年度で 702,605 回で、2012 年度の予想は 1,300,000 回位になるのではないかとのことだった。

今後の、センターとしての展開については、コンピューターを今より 5 倍ほどアップグレードをすることを行っている。また、キング群の挑戦は、郡内に 42 市と 18 学区あるが、それぞれニーズが違うため、できるだけ個別に対応できるようにすること。さらには、これは、担当者によって意見が異なっていたが、ebook を導入することで、今までの図書館利用層のさらなる拡大を図ることなどがあつた。

## ■イサクア図書館

意見交換後は、車で 10 分ほど移動して、実際にキング郡のサービスセンターシステムを導入している「Issaquah library イサクア図書館」を視察した。

おすすめの本を紹介している棚には、センターにて利用者の動向が分析されて選ばれた本が並び、入口近くにあるため、来た人が自然に目を移してしまう仕掛けになっている。日本では、スーパーの書店や、レンタルビデオ店などでよく見る光景である。(右写真)



(左写真) 会員カードにも一工夫してあった。デザイン自体もおしゃれで明るいイメージな上に、カード型のものと、チェーンを通せばキーホルダーにもなる型もあった。

### ■ライブラリー・コネクション

この後、担当者とのランチミーティングを終えて、この日は、当初の視察日程にはなかったが、ガイドをしてくれていた国近さんの紹介で、珍しい図書館があるということで、同じキング郡のシステムを導入している「Library Connection@Crossroads」と、「Library Connection@Southcenter」を視察した。



郊外のショッピングモールの中に、テナントの一つとして公共図書館が入っていた。入口の目の前には、フードコートがあり、ざわざわしているし、さらにモール内には音楽も流れているため、図書館内は決して静かな場所ではなかった。(左写真)

キング郡内には、2か所こうした大型スーパーの中にテナントとして公共図書館（ライブラリー・コネクション）が存在していた。テナント料は、ほかの店舗と同様だそうで、近くには本屋もテナントとして存在していた。(右写真)



中年の方や、子どもが何人か利用しているのを見て、おそらくですが、奥さんが買い物をしている間、ここで本を読んで待っていたり、

パソコンでゲームをして時間をつぶしたりしているのではないかと思った。しかし、こうして少しの時間でも本と触れ合う機会が増え、本を好きになるきっかけにつながるのであれば面白い取り組みだと感じた。

### ■バークレー公共図書館

26日は、ワシントン州を出て、シアトル・タコマ空港（通称シータック空港）から、飛行機に乗り込み、カルフォルニア州のサンフランシスコへ向かった。

27日は、最後の視察地であるカルフォルニア州バークレー市（人口 11 万人）にある



「Berkeley public Library バークレー公共図書館」を訪問した。

移動する車の中で、バークレー市は、60年代のヒッピー文化の発祥の地でもあり、全米で政治的、社会的に最も進歩的な都市とされていると説明を受けた。カルフォルニア大学バークレー校があることでも有名で、余談だが元国連高等難民弁務官の緒方貞子氏や、ソフトバンクの孫正義氏が同大学の卒業生とのことだった。

図書館に着くと、司書のスミスさんが出迎えてくれ、館内を説明してくれた。

まず、初めにスミスさんから、バークレー市民の多くは、図書館に対する理解度が深く、税金を払ってでも図書館は有効な施設であると認識されているとのことを聞き、感心した。

その証拠に、市民の約 75%が公共図書館の会員カード保持者であるとのことで、まさに驚きです。近隣の大学とも積極的に相互交流連携をとっていて、例えば、図書館カードの保持者は、大学の中にある美術館の入館料の割引を受けることができたり、逆に大学からは、教授が公共図書館で一般の大人対象に講義を行ったりすることもあるとのことだった。



中央図書館の概要は、1932年に開館し、2002年に現在の形へ、増改築されている。市内には、この中央館のほかに4つの分館があり、それぞれ相互貸出も行っている。中央館1階にある配送、仕分け部屋で、年間に150万部から200万部の書籍をスタッフが手作業で仕分けをいていた。

（←館内の様子）

数字を聞いて利用率の高さに驚いた。ちなみに中央館の蔵書数は、45万冊だった。

休館日は祝日しかなく、開館時間は、月曜日から金曜日までは午前 10 時から午後 9 時まで、日曜日は午後 1 時から午後 5 時までとなっていた。

館内は、古い建物だった場所に蔵書スペースがあり、この場所は天井が高く、開放的な雰囲気、多くの人が本を読んでいたり、自前のパソコンを利用したりしていた。

2 階は、レファレンスカウンターがあり、インターネットも普及しているが、対応できない人へのサポートや、難しい内容の問い合わせにも対応していた。無料 PC コーナーでは、45 台の PC を 1 日 2 時間まで使用でき、予約制で、利用者の多くは職探しの不労者だと言われた。「限度を超えるにおいや、衣類等の汚れなどがある人は、どうしているのか」と質問したところ、入口において厳しくチェックし、場合によっては、シェルターや、センター（支援組織）を紹介したりして対応しているとのことだった。

3 階は、雑誌、新聞コーナーとなっていて、4 階は、子ども向けコーナーだった。

司書の方の話では、上の階に行くほど、専門性が上がっていくということだった。



子ども向けコーナーでは、取り組みとして、子どもたちに早くから本を読む習慣を育てる事に力を入れている。特に、小さな子供対象には親子で参加できるイベントを開催したり、カルフォルニア州では小中学生には、夏休みの宿題がほとんどない事から、子供たち向けの夏休みプログラムを充実させたりしているとも言っていた。

（←子ども向けコーナー）

続いて最上階の 5 階には、アート、ミュージックコーナーがあった。この階は、音楽においては古いレコードなどまで並んでいるようで、主に専門的に目的をもって来る人が利用している感じがした。

館内を案内していただきながら、司書のスミスさんとの質疑の中で、「今後、新たな取り組みをどのように考えているのか」と聞いたところ、「利用者から、無料 PC を館内のどこでも利用可能にしてほしいという声があるので、館内のデスクトップの PC を増やすのではなくて、移動可能なラップトップの PC を増やしていきたい」とのことだった。規則にとらわれず、利用者のニーズに合わせて、柔軟に対応していくことが重要との考えだった。

最後に、今回の視察を通じて、主に参考になった点をいくつかまとめてみた。

## ■まとめ① 公共図書館は市民の頼りになる場所

まず全体的に、どの場所においても同じく感じたことは、市民の方から見る公共図書館の位置付けが違うことである。

アメリカの図書館は、日本の図書館に多くにみられる、「静かに本を読む場所、読みたい本を探しに行く場所」、というような本好きが集まる図書館といったイメージとは、少し異なっていた。例えば、日々の生活の中で何か困った事があれば場合によっては図書館で対処法を見つけることができ、子どもたちは自習の場としてだけでなく、図書館で学校の宿題を教えてもらえるサポートサービスや、職を求める市民が就職活動をする上で、活動支援だけではなく、前段階の履歴書の書き方や、PCの使い方まで教えてくれるといったこと等々、生活の中において頼りになる存在でもあると感じた。

### ■まとめ② 中央館（センター）は情報の拠点

アメリカ西海岸で見た公共図書館の利便性が高い理由に、機能分担がきちんとされていた点があげられる。日本のように行政が運営している公共図書館では各市ごとに図書館運営はそれぞれ別であり、中央館、分館も含め、各市においてそれぞれ必要になってくるが、アメリカ（ワシントン州）では、公共図書館は行政が運営しているわけではなく、独立した図書館委員会というところが運営している。そのため、行政の区域だけではなく、広域にいくつかの郡をまたがって運営している場所もある。

一つの図書館ネットワークで構築されている範囲全体を、センター的機能を持った中央館もしくは、システムセンターが中心に管理し、一括してその他の分館へ各種プログラムや最新情報等、本だけでなくインフォメーション（情報や案内）全般に関して集約したデータを発信していた。このことにより、中央館の役割はとても重要であることが解った。

### ■まとめ③ 地域密着型の分館機能の充実

中央館と地域の分館では、その役割は全く違っていた。中央館が情報拠点としての機能を強化向上させ、更に新たなプログラムが充実するということは、同時に地域住民に一番近い場所にある分館の施設内容が充実していなくては、区域全体の図書館の利便性は向上しないと感じた。

その証拠に、シアトル市のシステムでも、キング郡のシステムでも、中央館で行っている多くのプログラムの内容も充実しているが、何より、地域の分館がどこも立派なつくりになっていて常に多くの市民に利用されており、中でも多いところでは1日当たりの利用者数が1,000人を超える分館も存在し大きな驚きだ。

また、既存の公共施設の枠を超えて、郊外のショッピングセンター等の中にも分館を開設しており、旧来の図書館が持つイメージを払しょくし、誰でも入りやすい図書館の姿を作り上げていたことも非常に参考になる点だった。

さらに個々の図書館では、利用者向けにフェイスブックやツイッターなどでの情報発信も行っていて、利用者には常に図書館のリアルタイムな情報が配信されていたことなどは、すぐにでも真似できることだと思った。

**■まとめ④ 「take time to read（読書の時間を作ろう）」プログラム充実が重要なカギ**

当たり前のことだが、図書館はどれだけ立派な建物（ハード）を作っても、中身（ソフト）が充実していなければ、単なる無駄な公共施設となってしまう。

参考になったのは、毎年新たなプログラムを数多く作り上げているワシントン州キング郡の中央センターのように、政策として一人でも多くの読書家を増やすためのプログラムを作ることに重点を置き、特に0歳から5歳までの子供と親向けの読み聞かせプログラムを作ったり、また、なかなか図書館を利用できない環境にある人たち向けに、移動図書館（車）を作ってどこでも出向いて行ったり、夏休み期間の子供たちの宿題サポートといった、関係者達が常に新しいプログラムを作り上げ、その取り組みに果敢に挑戦する姿に感動した。

こうして読書家人口を増やすことによって、最終的に図書館の利用が増えるといった相乗効果につながっている。街中や、バスの側面など至る所に、「take time to read」の広告を出し宣伝もしているとのことだった。

**■まとめ⑤ 調べる場所から創造する場所へ**

シアトル公共図書館で、今後の図書館の方向性を聞いたところ、今後は新しいインフォメーションを作っていくことが重要で、それは、図書館は本を読んだり情報を得るだけでなく、加工し新たなものを創造することで、自作の本を作ったり、論文を作成したりできるメーカーズスペース的な場所になっていくだろうと言っていた。これは、ホイットマン中学校でも同じことを言っていた。テクノロジーの使い方を教えて、ワードを使用してエッセイを作ったり、エクセルを使用して計算したりできるようにする。つまり、調べた事を実際に生産にまでつなげるようにしていきたいとのことだった。

実際に、新たに起業を考えている人が、図書館に行けば、そうしたノウハウまで教えてくれたら、若者の起業意欲も促進されるかもしれないと思った。

**■まとめ⑥ 図書館には専門司書が重要**

どの公共図書館でも、司書が充実していたように思う。これは日本でも同様と思うが、アメリカの図書館司書の方々のスキルや使命感のような意識のレベルの高さに驚いた。本を知り尽くした司書だから様々な質問や、要望に応えることが出来るし、信頼もされるのだろう。これは、中学校でも同じだった。

ホイットマン中学校の司書のクリスさんは自分が初めにすべての本を読んでから子供たちに進めていた。ちなみにアメリカでは、中学校、高校には必ず専任司書がいるとのことだった。

小学校でも約半分の学校で専任司書がいるそうだ。数多くある本の中から、司書がおすすめの本を紹介してくれる。読んだ後に、その本について話ができる司書がそこにいれば、子どもたちも本がさらに好きになるのだと感じた。



## ■まとめ⑦ 電子書籍についての現状

シアトル図書館の現状について、全ての電子書籍の数は 61,000 冊で、うち著作権フリーのものが 15,000 冊程度であり、電子書籍の貸出は一度に 25 冊まで可能で、返却は 3 週間で自動消去される仕組みになっていた。音楽については、1 週間に 3 曲まで無料ダウンロード可能ということだった。

電子書籍等の予算は、全体のコレクション予算の 10%+基金を合わせて年間 90 万ドルほどあるということだった。課題としては、出版社大手 6 社中で、2 社しか、電子書籍の購入を図書館には許可していないという現実があり、全面解禁までは残念ながらまだまだといった感があった（本音は売りたいくないらしい）。

展望としては、将来的には、ほとんどの書籍は電子化されると予想しており、更なる図書館利用層の拡大を期待しているとのことだった。しかし、電子書籍の普及状況、また図書館での利用方法の統一化など、まだまだアメリカでも全国の図書館（協会）と出版社との間で会議を重ねているということで、進捗度は日本とさほど変わらないと感じた。

## ■むすびに

今回アメリカ西海岸では 11 箇所の図書館関係施設を見てきた。

アメリカの図書館は、生涯学習施設としての役割にとらわれず、また、縦割りの行政システムの枠を超えて、利用動機に応えた多様なサービスを実現し、常に市民ニーズに応じて、変化し続けているということが随所で確認できた。

こうして今日に至るまで、時代の要請に合わせて成長してきたアメリカの図書館は、つまり、「行政がやりたい、やり易いこと」を提供するのではなくて、「市民が求めるもの、市民の役に立つもの」を提供してきたことで、市民から期待と、信頼を得てきたのだと感じた。

安城市においても、こうした精神をしっかりと今回の調査の教訓として生かしていかなくはないと強く思った。